クズでもヒーローになれますかねェ？【諸事情により題名変更しました】

虚ろな勇者の影

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「なんで、ヒーローを目指すかって？

――――そりゃ、ヒーローの弱み、恥ずかしい記憶を握ってニヤニヤしたいからに決まってるじゃないか！」

こんな感じの少女がヒロアカの世界で主人公達と共に青春を過ごす？話です。

☆よくある転生ネタです。（（誰得？俺得っ！だからキャラブレあるかもです。

☆残念ながらチート個性ではありません。（（無双出来ません！優位に立つ事はあるので、許して！

☆主人公はナチュナルクズ子です。

☆元の題名は『ヒーローになる理由？そんなの……』です。
☆こんな感じでも、良かったらどうぞ！

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 10
第3話 …… 23
第4話 …… 32
第5話 …… 48
第6話 …… 63
第7話 …… 80

第1話

それは、突然の事だった。

ある公園での出来事。緑色のもさっとした愚鈍そうな少年の前に立つ、金髪が爆発したつり目のガキ。手からはボボホッと絶えず小爆発が起こっている。危ない。

「ひどいよかっちゃん……！

泣いてるだろ…?!これ以上は僕が許さやなへぞ」

「無個性の癖にヒーロー気取りかデク！」

どうやら、緑髪の少年は震えながらも誰かを庇っているようだ。

金髪ガキの圧倒的爆発――個性に立ち向かうその姿勢は、見る人が見れば何とも胸が熱くなる。

私はそんな少年漫画の少年期のような光景を眺めつつ、ハリボーを食べていた。

……もう一度言おう。それは、突然だった。

――――爆発。

――――そして爆風。私を襲う衝撃。ハリボーが喉に詰まるっ！

――――思い出された前世の記憶……

前世の私は死んだらしい。

前世の私は情報収集が大好きな、一風変わった高校生だった。

人の弱みを握り脅すのを至上の趣味とし、とあるお偉いさんの浮気をネタに恐喝し、得た金で生きていた。わりとクズだった私。

……振り返ってみると見るとむしろ社会的には死んでよかったような気がする。

まぁ、話を戻そう。

そんな、恐喝（楽しい話し合い）と弱味（楽しい情報収集）握りに明け暮れながら、したたかに生きていた。

だが、私は甘かった。お偉いさんを舐めていた。

その日（私が死んだ日）、私はとある情報がいい値で売れ、それで得た諭吉さんの枚数を数えながら愉悦に浸っていた。

そこに、俗に言う、ヤグザと呼ばれる人達が各々の武器を持ってやってきた。どうやらお偉いさんに雇われたらしい。こちとら花も恥じらう高校生2年生。集団暴力に敵

うはずもない。
その後、色々あって……死んだ。（思い出したくない）
んでもって、なんだかんだあってこの僕のヒーローアカデミアに転生したらしい。（自称神と対話して）（漫画のような世界では無く、実際の漫画の中）
報情読気（ほうじょうよむき）、女、肉体年齢5歳は喉に詰まったハリボーを吐き出しながら思う。
「……嘘、だろ？マジか、
マジなのか!!……イヤッホオォォォォオ!!!
勝己君、出久君、産まれてきてくれてありがとう、本当に、ぼんどうに〝!!」

――――私は歓喜した。
無念に終わった人生をやり直せることに。
――――私は狂喜した。
あの大好きな「僕のヒーローアカデミア」の世界に転生出来たことを。
――――私は喜舞した。
主要な登場人物（主人公とそのライバル）との関係があることに。

結果。

修羅場ってた、緑髪の少年緑谷出久と、金髪ガキ爆豪勝己の手を取り、咽び泣いた。

「幸せかよ！幸せだよぉ！こんなに幸せでごめんなさいっ！

自称神、ハゲなんて言って本当にすまない！ドライヤー要らずの素敵な髪だよぉ!!」

「えっ？えっ？」

「ＢｏｏｏｏｏｏｏｏｏＭ!!」

そして、勝己君に握った手を爆破され、出久君からはハンカチを貰った。ハンカチは家宝にします。はい。

気味悪がった勝己君らは公園から出ていき、出久君は守っていた少年とともに私を心配しながらも去っていった。

その背中を眺めながら思う。

「そっかぁ、君らが、君達が！

これから数多の至難と苦難を乗り越え、勇気と希望、熱意執念、災悪を打破し、友情を持って成長する……ヒーローになるのか！

それを、私は知っている唯一の人間。

これを、この物語（青春劇）を特等席で観ることが出来る人間！

アハッ、アハハハッ！アッハッハッハッハッ！

笑いが止まらん！何故この世界に生まれさせたかは知らないが、好きな様にさせて貰うよ、自称神！」

これは私、報情読気がおこがましく、すうずうしくも彼らが織り成す「僕のヒーローアカデミア」を末席で見守り、時に引っ掻き回す物語である。

☆☆☆☆☆

――――それから１０年が経った。

所はかわって折寺中学校。桜咲く麗らかな春の日。私は手に持ったタブレットでいつものように情報収集。

そんな中テンション高めの先生が喋っていた。

「えー、おまえらも3年生ということで!!

本格的に将来を考えていく時期だ!!

今から進路希望のプリント配るが皆(みんな)!!!」

そんな、わかりきった事を聞かないで欲しい。クラス全員がそう思ったことだろう。

もちろん、私もそう思った。(それを知っていた。)

「だいたいヒーロー科志望だよね!!」

各々の個性でアピールする生徒達。原則、個性の発動は禁止されているが、結構それは守られていない……いいのか！それで。

ワイワイと、中学生らしいにぎやかな教室。そこに響く自己主張のでかい声。ちなみに足を机に置いたりと、主張もでかい。

「俺はこんな〝没個性〟共と仲良く底辺なんざ行かねーーよ」

「そりゃ、ねぇだろカツキ!!!」

「ブーブー」「ブーブー」

当然巻き起こる嵐のブーイング。それをものともせず、むしろさらに馬鹿にしたように、

「モブがモブらしくうっせーー!!!」

いつも思うが、こいつのメンタルどうなってんだろ。

まぁ、こうでかい態度取れるだけの実力を持っているからこそなのだが。

「あー確か爆豪は…雄英高校志望だったな」

「国立の!?」

「今年偏差値７８だぞ!!?」

「倍率も毎度やべーんだろ!?」

「「ざわざわ」」

「そのざわざわがモブたる所以だ！
模試じゃA判定!!俺は中学唯一の雄英圏内！
あのオールマイトも超えて俺はトップヒーローと成り!!
必ずや、高額納税者ランキングに名を刻むのだ!!!」
長々と野望を語る彼。あーぁ、また机に乗ってる。
実力の伴ったクラスの暴君（ガキ大将）、それが彼、爆豪勝己だ。
「あ、
そういや、緑谷と報情も雄英志望だったな」
あっ、勝己っちが変な顔で固まった。ワロス。写真撮っとこう。
1拍置いて巻き上がる嘲笑。教室が吹き出す。
出久君と、私を馬鹿にする声。出久君は必死に否定しているが……それを彼が最後まで聞いてあげるわけがなく、
「BoooM!!」こらデク!!!」
ありやりゃ机がおしゃかに。
「〝没個性〟どころか〝無個性〟のてめェがぁ～
なんで俺と同じ土俵に立てるんだ!!?」
「待っ…

違う、待って、かっちゃん」
声、こっわ。ドス利きすぎだろ！
漫画読んでる時から常々思ってたけど、本当、爆豪勝己ってヴィラン顔だよねぇ。
そして出久君負けるな！言いたい事はちゃんと言うんだ！
それによってさらに爆豪勝己の神経を逆撫でるんだ！

――――それにしても、ちゃんと原作通りに進むもんなんだねぇ。

事の始まりは、中国の軽慶市での「発光する赤児」の報道以来世界各地で超常現象が報告されたこと。今では世界総人口の約８割が超常能力〝個性〟を持つに至った超人社会。
〝個性〟を悪用する敵（ヴィラン）を〝個性〟を発揮して取り締まるヒーローは人々に讃えられている……
設定もセリフも状況も何もかもが一緒。私が入ったことにより、少し変わってしまった部分もあるにはあるが、許容範囲だろう。
どうも、お久しぶり。
私、報情読気。女、中学三年生。個性「情報遊び」。転生先のヒロアカの世界で元気に

やってます。

第2話

皆様、お元気ですか？

こちらは特に変わりはありません。

相変わらず、爆豪勝己君は元気に緑谷出久君を虐めています。

「おい、流石にやべーんじゃねーか？」

「カツキー、やりすぎだぞー」

という声がちらほら上がっている。まぁ、それで止まる彼では無いのだが。

「報情ちょっと止めてくれよ！」

「やだよぉ？」

何故か私にお鉢が回ってきた。止めるだって？何を言ってるんだ。あれはね、振動のない場所で放置しておくのが1番いいんだよ？

「だってお前、あの歩くニトログリセリンを唯一扱える人間じゃねぇか！」

「いやぁ、なんで止めなければいけないのかなぁ？」

歩くニトログリセリン……言い得て妙だね。

「なんでって、アイツ、うじうじしててムカつくけど、流石に怪我はやべぇだろ」
「いやね、彼はあの多くの挫折と理不尽な暴力によって、鉄壁の精神を持つ主人公になるんだよ?
　今は、その土台作り為の避けては通れぬプロセス。むしろ、止める意味がわからないね」
「怪我してもいいってのか?!!」
「それが、主人公のためだからねぇ」
「……お前、前から思ってたけど、地味にクズだよな」
「そうかなぁ?」
　めちゃくちゃ引かれた。
　何が悪いのかねぇ?あの、「かっちゃんによる理不尽な暴力」があったからこそ、彼はあんなにも輝ける、何にも負けない、折れない人間になると言うのに……。
　わざわざその汚れ役をやってくれている爆豪勝己に感謝しなければいけないぐらいなんだぞ。君達は!
　ヒートアップしていく爆発。
　もちろん、先生は巻込まれるのを恐れ、手を出すことはない。それでいいのか!相澤先生を見習え!

☆☆☆☆☆

放課後。

あのあと緑谷出久はぶっ飛んだ。でも、普通に生きてる。しかも授業もしっかり受けてた。

凄いね、こうやって痛み耐性つけてきたんだねぇ。本当の意味でのタフネスは彼を指すと思うんだ、私は。

「カラオケ行こーよ」

「それっきゃねーな！」

がやがやと騒がしい教室。私は相変わらずタブレットで情報収集。

「話はまだ済んでねーぞデク！オラ、てめぇもだ！目死に野郎！」

「ん？」

目死に野郎というのは、爆豪勝己直々につけて頂いた、渾名。相変わらずセンスないねぇ。

いやぁ、目死んでるのはある意味しょうがないというかね……誰だってあんな「死」を経験したら目のハイライトも消えるって。

タブレットの画面に映る自分の顔を見つめながら思う。

白い肌、黒い目に黒い髪を首の辺りまでで、短く切りそろえてある。客観的に見てもブサイクには絶対見えない、その容姿。情報収集で顔が良いに越したことは無い。そう言う意味でも私は母に感謝である。

「なに、シカトしてんだゴラ!」

「あーーーーーー!?!!」

小爆発。緑谷出久のヒーロー分析ノートが爆破された。

緑谷出久の顔が歪む。目からは涙が……相変わらず涙腺ブチ切れてんなぁ。

「いいか、よく聞け!

一線級のトップヒーローは大抵学生時代から逸話を残している。

俺はこの平凡な私立中学から、初めて!唯一の!「雄英進学者」っつー〝箔〟をつけてーのさ。

まー、完璧主義なわけよ」

なんて言うか、あれだね。

「……相変わらず、みみっちい」

「うっせぇ!死ね!!」

うぉ。小声だったのに聞こえたのか。でもまぁ、事実だよね。

「つーわけで一応さ、雄英受けるなナードくん」

「……」
「いやいや…流石になんか言い返せよ」
「言ってやんなよ。
かわいそうに中三になってもまだ彼は現実が見えていないのです」
よし、よく言った。爆豪勝己！
君なら言えると、緑谷出久のメンタルにランチャー並のダメージを与えると信じていたよ!!
そして、取り巻き君たちの追い打ちも素晴らしい！
……あれ？
「私はぁー？受けてもいいのかーい？」
「うっせぇ、黙ってろ！てめぇは後だ！」
「ブーブー」
無視された。
緑谷出久は何も言い返せずにいるようだ。そりゃそうだ。それは全て正しい事なんだから。
私は原作を知ってるからその足掻きを、諦めの悪さを主人公の美点として捉える事が出来る。が、客観的な事実として、無個性の緑谷出久はヒーローになれない。

現実から目を背け続け、成れもしない者に中毒の如くのめり込む、言わば狂人だ。
「そんなにヒーローになりてんなら効率良い方法があるぜ。
来世は〝個性〟が宿ると信じて…屋上からのワンチャンダイブ!!」
まぁ、間違ってはいないね。私も死んだら転生して個性宿ってたし。
「まぁまぁ、そんなに言っちゃ駄目だよ。本当に飛んだら自殺教唆罪だからね？言うならもっと婉曲に言わないと」
「俺の道にいたのが悪い」
「出たよ、カツキニズム」
「言うなとは言わないんだな」
「まぁね。面白…ゲフンゲフンっ！必要な事だからね！
それとそろそろ緑谷出久君は帰りな。
――――ノートは1階金魚水槽に浮かんでる、恐らくね」
「えっ？……うっ、うん！ありがとう？」
「バイバーい」
とぼとぼと帰っていく緑谷出久君。このあと君は憧れのヒーローに夢をぶっ壊される……頑張れ!!
「で、私はなんだい？」

「てめぇは、俺が直々にぶっ倒す」
「うん」

「……あっそうだ、そこの取り巻き君！」
「えっ？オレ？」
「そうそう。ここから1番近いスーパーの裏、10時。合言葉は「サンタクロース」……そろそろ切れてきた頃だろ？」
「バレてたか。そーなんだよ、よく知ってんなぁ」
「その手の情報収集は得意だからね。あと、帰りは商店街通っちゃ駄目だよ。恐らく、ヒーローが巡回してる」
「毎回助かるわ。ほい、情報料」
「毎度ありぃー」
　ＢｏｏｏｏM!!
「俺を無視すんなぁ!!」
「えっなんで！うんって言ったじゃん!!」
「あ゛あ゛!!?」
　あー、これはちょっと怒らせ過ぎたねぇ。冗談抜きで。無視されんの苦手だもん

ねぇ。ごめんごめん。

でも、だって、「うん」以外に何を言えばいいのさ!?

言っとくけど、サシでやり合ったら私死ぬからね？冗談抜きで！私めっちゃくちゃ弱いからね!!?

――――と、そんな理由（真実）言ったって無駄だよねぇ。

にしても爆発やべぇ。タブレット壊れるって……ちょっと大人しくしてよ！

私は嵌めていた手袋を取り、爆豪勝己の頭に置く。あくまで自然に。

「ほれほれぇ、落ち着け落ち着け、よーしよしよし」

「撫でんな!!犬じゃねェ!!!」

個性――――「情報書き換え」

「――――な、落ち着けよ？」

個性を使い、干渉。【イライラする】という情報を【落ち着く】に書き換える。

しかして、爆豪勝己は落ち着いた。

「お前、今何した!!?」
「いや、やっぱ落ち着いてないかも」
ただでさえつり上がっている目をさらに釣り上げながら睨んでくる。こいついつもプチプチキレてるからなぁ。
キレてる状態が落ち着いてるって……やべぇぞ！お前!!
☆☆☆☆☆
【個性】「情報遊び」
・手で触れた物（生物含む）の情報を読み取ったり、書き換えたりできる。また、自分の持つ情報を画像として相手に送ることが出来る。
・書き換え、情報投与の効果時間は、最大２４時間（任意で効果時間変更可）。１日何回でも使えるが、使い過ぎるとめちゃくちゃ眠くなるぞ!!
☆☆☆☆☆

「よし、そろそろ帰らないとだね
取り巻き君達と一緒に帰りな――――いつもどおりにね？」
そう。今日は大事な大事なヘドロ事件の日だ。
弱い緑谷出久が爆豪勝己を助けようとする素晴らしい日だ。……あの爆豪勝己が恐

怖に歪む顔。あれは後にも先にもあれだけだろう。是非ともリアルタイムで見て、（弱味として）写真撮って、本人に見せてあげよう。

「おい、目死に野郎！今の説明しろやァ！」

「うるさいなぁ。早く帰ってよ一年後ぐらいにするから」

☆☆☆☆☆

やっと帰ってくれた。あんまりにもしつこくてもう1回個性使おうか迷ったよ。まったく。

「どーれ。そろそろオールマイトに緑谷出久が夢をバッキバッキにされてるとこかな？写真撮ってもいいけど、緑谷出久君の泣き顔は、もうストック充分。彼、泣きすぎだよ」

プルルル、プルルル。

携帯が鳴り、ポケットから今時では無いガラケーを取り出す。

「はいはーい……あっ、土壌様ですか！

はい。もちろんです。今日のレートは２８４６９。3時方向に向かって3回右スマッシュ。見回りルートは栗木１５、運送は柿木４ですよォ。……はいそうです。振り込みはいつもの口座に。……女の子は大切にしてくださいねぇ？」

プルルル、プルルル。

今度はスマホ2の方か。そう、実は私スマホ3台もってて、ガラケーも合わせれば5台になるんだよね。

いやぁ、前世でもこんなに持てなかったよ。伊達にこの世界ヴィラン湧いてないよね。情報業が売れる捗る!!

最高の世界だ!!……あっ、電話出んと。うぇ、ＬＩＮＥも結構溜まってんなぁ、消化しながらでいっか。

「もしもし?……未先ちゃん?どうしたの?……あぁ、物戻直也君ね」

また恋愛相談かぁ。最近多いよね。恋多き事は良きことだね。その調子で私にお金を積んでほしいね!

そう思いながら、もう1台（ＬＩＮＥをやってない方）のスマホを取り出し、データベースを開く。

「……えっと彼はまだウブな子だね。うん。好みはショートカット、一緒にガンダムのプラモ作ってくれる子。逆に苦手なのは手作りを押し付けてくる人。いつも海岸沿い夕日を見て帰ってるみたいだね。こんなに感じでオケ?

……え?告白が成功するかって?追加情報は３０００円だよォ?

……毎度ありぃー。成功しないと思うよ?だって彼、既に甲冑中学2年生の女子と付

き合ってるもの！アハッ!!

……聞いてないって？そりゃ、言ってないもの。まぁ、ちゃんと情報渡したんだからお金払ってねぇー。情報は金なり、だよォ？」

ブツっ。

いやぁ、やっぱ女の子は恋ですね。あと、ダイエットと美容。これでがっぽりだね。うひょー。

「ＬＩＮＥも消化完了。よし、ヘドロ事件の全容、いっちょ見学しますかぁー」

報情読気（ほうじょうよむき）、転生人。今日も楽しく情報収集してます。

第3話

どうも皆様、さっきぶりです。
私は今、田辺店という雑貨屋の3階にいるよォ。
あれだね、ヘドロ事件が起こる田等院商店街の中のお店の一つと言えばわかりやすいかな。
ちょっとお店の人と話し合いして少しだけ借りました。
「わァー、ヘドロって、実際に見てみると結構気持ち悪いね。
あー、本当に爆豪勝己が囚われてるんだねぇ。凄い凄い！頑張れー！」
スマホのカメラでカシャカシャと撮りながら見る。うーん、アングル的に爆豪勝己の顔が見えないなぁ。もうちょいこっち見てくんないかなぁ。
「結構、野次馬集まってきたね。……あっ、あれは⁉
オールマイトじゃないか!!」
あのガリガリに痩せたトゥルーフォームだ！初めて見たけど……うん。分かってててみないと全くの別人だね。首めっちゃ長いね。

「原作で知ってたとはいえ、あっさり平和の象徴、Ｎｏ．１ヒーローの弱味握れちゃったよ…」

ヒョロくなったオールマイトの写真を眺めながら思う。でも、ある程度知ってたことだからね。あんま面白みないね。

実は五十代越えのジジイだったとか、もうちょい意外性が有る情報が欲しいなぁー。

「おっ！緑谷出久君が飛び出した！」

彼に沢山の制止の声がかる。だけど彼は止まらない。

多くのヒーローがいる中、誰も助けようとはしない。ただ１人を除いて。この場のヒーローでも何でもない、小心物で、〝無個性〟の彼だけが!!

――――唯一、動いたんだ。前に進んだんだ。確かに爆豪勝己を助けようと動いたんだ!!

「カッコよすぎだよ……主人公ぅ!!」

緑谷出久は鞄をヴィランに向かって投げ、注意を逸らす――爆豪勝己を引っ張り出そうとするが、ヘドロと一体化しつつあるため、上手くいかない。

その行動を見ていたオールマイトは限界を超え、動き出す。動き出さずには居られな

い。

「ヒーローはいつだって命懸け!!!!!」

ＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨ!!!

突風が吹き荒れる。コンクリートであるハズの地面がまるでせんべいのようにパリパリと砕けていく。

「……オールマイトやべぇな。画風もそうだけど。右手１本でで天候変えるとか、人間やめてるでしょ」

降り出した雨を眺めながら感じる。

本格的に僕のヒーローアカデミアのストーリーが始まったのだと。

この後、オールマイトに見出された緑谷出久はワン・フォー・オールを受け継ぐため、必死のトレーニングが始まるのだろう。

「うん！ワクワクが止まらない!!

爆豪勝己君の恐怖に怯えた顔撮れたし、今日は本当いい日だ！」

☆☆☆☆☆

あの後。

私はさっさと店から離れ、ヘドロ回収の一部分を見た。

緑谷出久君はヒーロー達に怒られ、爆豪勝己君は逆に褒め称えられていた。

それを横目にしながら商店街を抜け、コンビニに寄り、あの写真を現像した。……明日が楽しみだ。

そうホクホクしながら家に変える道を歩いていた時だった。

「クソナードが!!!」

そう言って、こちらに向かってくる影。

マジかよ。アレか、緑谷出久の行動に色々プライドぶっ壊されて切れた爆豪勝己がブツブツ言う、あのシーンか!!

色々思い出してるその間にもずんずん近づいてくる。……関わりたくないなぁ。

「俺の前に立つな、殺すぞ」

うわぁお。こっわ。

私何もして無いよね？何この理不尽な八つ当たり。私ちょーっと怒ったよー？

私は嵌めていた手袋を外す。

「えーと、それはもしかして私のことかなァ？」

「うっせぇ、しゃべんなクソが」

……うん。弁解の余地なし。流石それはないよねぇ？

私は去っていこうとする爆豪勝己の手を掴み取り、個性発動。

ヘドロに向かって個性発動しまくってて今歩くのもやっと、振り払う気力も無いって

事はしってるんだよ。

――――『情報検索』、ヘドロに襲われている時の心情。

「離せ！この目死に野郎!!」

「先に喧嘩売ってきたのは君だよね？私はそれを売値で買ったまでだよ？

……それにしても、へぇー、ふーん。

君、緑谷出久が飛び出してきた時、ヘドロを取り除こうと必死になった時、彼に助けを求めてしまった、救われた……と思ってしまった！

こりゃー愉快愉快。無個性の彼に、勝ち組チート個性を持った爆豪勝己が救われたなんて!!」

「……黙、れ」

「あぁー、なるほどー。だからあんなに緑谷出久君に切れていたんだね？

自分の一瞬でも抱いてしまった感情を誤魔化すために！打ち消す為に!!……違うかい？」

「黙れ!!」

ＢｏｏｏＭ!!

「おっと、危ないよォ。私じゃなかったら当たってたぞ！」

あー、面白いなぁー。人の聞かれたくないこと、言われたくないことを堂々と、嘲る

ように言うのって。めちゃくちゃ楽しーなぁ！
いっつも、偉そうにしてる爆豪勝己だから余計かもね。
まぁ、でも、
「ちょっと言いすぎたわ、流石に。
原作の主要人物だからさ、テンション上がっちゃってさ……って何言ってるかわかんないか。とにかく、ごめんよ！」
あら？黙ったままだ。
「いやぁ、本当申し訳ない！
お詫びに友達になってあげるから！ねっ！
今、情報読んだけど君、友達少ないこと気にしｔ（（ＢｏｏｏＭ!!
「気にしてなんかねぇ！」
ちょっと殺す気!?前髪焦げたんだけど!!
怒るとすぐ爆破するよね。ある意味、感情情報が読み取り易いけどさ。
今の爆破とかもう、バッチリ気にしてるよね。
「まったく、わかりやすい奴め。今日から私は君の友人だ！」
「いらねぇーよ」
「自分で言うのもんだけどさ、私と友人になっとくとお得だよ？あらゆる情報持ってる

よ？友人なら無料で売るよ？
　ていうか、私スマホばっかやってるせいか、友達一人もいなくて……中学入って一人も友人居ないとか、軽く絶望というか!!?」
「それてめぇが欲しいだけだろ」
「まぁ、それもある」
　もうなんか、クラスでそれぞれのグループが出来ちゃってて、入りにくいし、声かけにくいんだよ！
　その点、つるんでる仲間は居るものの、君は基本ボッチだろ？
　あと、ヒロアカの重要キャラクターだからね。緑谷出久君とも友達になりたいけど、彼、これから色々忙しいからね。
「今、この時をもって君と私は友人となった！拒否すればこの写真を君の母さんに見せる！」
　握った手からその写真情報を送る。本当便利だなこの個性。
「ほとんど脅しじゃーねか！つか、なんで持ってんだよ!!?」
「いいじゃん。細かいこと気にすんなって、禿げるぞォ！」
「ハゲねぇわ！」
「よし、早速友人としてフラフラの君に肩をかしてやろぅ！」

「友人じゃねぇ!!」
君、私の個性忘れてない？相手に触れている間、相手の情報読み放題、見放題なんだよ？
まったく、素直じゃないねぇ。
――――本当はまんざらでも無いくせに。
よっこいしょっと。あらま。結構重いねぇ。
自慢じゃないが、私１０キロ米抱えて走れないぐらいには、ひ弱なんだよなぁ。
支えたのはいいけど、爆豪勝己の家まで持つか？
「おい！やめろ!!!」
「はいはい。さっさと帰るよォ」
反抗も出来ないぐらい疲れてんだったら、大人しく肩借りろっての。
「はーい。進むよォ。いっちにーいっちにー」
「……もうお前本当黙れ」

☆☆☆☆☆
あの後、なんだかんだあって無事爆豪勝己を送り届けることが出来た。なんで彼の家を知ってるか、って？私の情報網舐めんなよ。

自慢だけど、来年の雄英高校1年Ａクラスの人達の家はチェック済みだぞぉ！それと個性と好きな物、家族構成含め……凄いだろぉ！

どうも、私報情読気。受験生。気の置けない友人を作りつつ、毎日楽しく生きてます。

第４話

「へーい！爆豪勝己君！私に勉強を教えてくれぇ!!友達だろぉー」
「断る」
　はい、皆様お昨日ぶりです。今日もいい天気ですね。
　今の状況は簡単、私が爆豪勝己から勉学の教えを請おうと頭を下げているのですが、すげなく断られています。
「そこを何とか、ね！自慢じゃないけど私模試成績雄英判定Ｄだからね！このままだと落ちるからね！」
「てめぇ、頭悪かったのか?!」
　うん、私もあまりの低さにびっくりしたわ。
　でも、よく考えてみれば、情報収集で授業受けてないから、わかんないのも当たり前なんだけどね。
「君は！いつ！私の！成績が！いいと！判断したんだ!!」
「雄英志望だと聞いた時だろ」
　勉強はなぁ、やらなきゃよくなんねぇんだよォォォォ!!

よーし、勉強やるかって思って雄英高校の過去問を開いたら、あらびっくりなーんにもわかんなかったんだよ！

前世の記憶あるから余裕だと思ってた私をぶん殴りたい。前世も前世でなんの勉強もせず、情報収集しまくってたんだよ!!

「まぁ、兎に角この問題の解き方教えてくれぇ」

「なんで俺が敵のてめぇに教えなきゃなんねぇんだ？」

「そりゃ、…殴りごたえのある敵の方が面白いだろぉ？」

ニヤリと顔を歪めつつ、挑発的に言うのがポイントだ。

「……X式にβとαを連立して代入」

「おぉ！ありがとう!!お礼にハリボーをあげよよう！」

「いらねぇー。さっさと終わらせっぞ」

うんうん。素直でよろしい。

あんまり頑なに断るようだったら、個性使ってクラス皆の前で「3回廻ってワン！」をやらせる所だったよ。

私は分からないところを聞き始めた。

舌打ちをしたりと態度が悪いものの、めっちゃ丁寧に教えてくれる。恐らく、やるか

らには1番、完璧にやりたいのだろう。
そんなことに軽く驚きつつも、勉強を進めていった。
「…かっちゃんが勉強を教えて上げているなんて！信じられない光景だ、流石報情さん…！」
と言ってる声が聞こえたとか聞こえなかったとか。

☆☆☆☆☆
「とっ、この辺までいいよォ。ありがとォ」
「いや、お前のクソ頭ならこれもやっとかないと駄目だ」
「いや、君の個性練習の時間まで削る訳には行かないんだよォ」
「!?なんで知ってんだゴラ!!?」
めちゃくちゃ凄んでくるなぁ。
まったく、そんな睨むなよォ。三白眼なんだからよけー恐ろしいわ。
「まぁ、そこは企業秘密で。
……でも、あの公園ではやめた方がいいと思うよ。爆音がうるさいって苦情来てるから。

多分、同中の生徒に努力してる姿を見られたくなくてあんなに遠くまで行って、個性練習してたんだろうけど」
「どこまで知ってやがる、殺すぞ」
何処までも、かなぁ。この辺の情報は大体私のとこに集まってくるからね。
「いや、殺すなよォ、ほらさっさと行こうじゃないか」
「てめぇはついてくんなクソが！」
「クソじゃないよぉ、クズだよォ。
まぁ、ちょっとしたお礼さ。邪魔はしないよ」

☆☆☆☆☆
所変わって、学校近くの河川敷。もちろん、人っ子一人居ない。
そこに鳴り響く爆発音、言うまでもなく爆豪勝己の個性だ。私はそれをただ見てるだけ。
「ん？オールマイト、海浜公園での目撃者多数？」
それも、タブレットＰＣでニュースをチェックしながらである。
ついでに、仕事の電話したり、溜まっていたＬＩＮＥの消化、Ｔｗｉｔｔｅｒのコメ返しなど色々やってた。

それから1時間経った、爆豪勝己の爆発威力がそろそろやばくなってきたころ。
「ふむふむ、なるへそなるへそ。大体わかった――――お疲れ様、爆豪勝己君。喉乾いただろぉ？はい、これお汁粉」
爆豪勝己君は爆発をやめ、そのまま自動販売機に向かい、ミネラルウォーターを購入。
……お汁粉には全くの無反応だった。
全力でボケたのに！無視されんのが1番心に来るわぁ。
いいもんね。自分で飲んでやる！あー、美味しいなぁーこの温かさが心に染みるなぁ――！
……ってこんなやさぐれてる場合じゃなかった。
「えっと、君の現時点での最大威力はオールマイトの『ＴＥＸＡＳ　ＳＭＡＳＨ』の威力の約6分の1。
爆炎威力だけだけで言えば　轟炎司……じゃない、エンデヴァーの個性、ヘルフレイムの小さい火の玉と同じぐらいの攻撃力が有るねぇ。
うん。控えめに言って、君本当に中学生？そこらのヒーローよりずっと強いよ？」
あら？爆豪勝己君固まってるし。どうしたんだろ？目がなんか凄い開いてるよ？
……まぁ、続けよう。
「あえて、弱点というか、足りない部分を上げるとすれば、それ以上の火力出すと手が

ぶっ壊れることだね。もっと手の皮、骨を鍛えないと。
あと最大火力になるまでの時間がかかりすぎかな。オールマイトだったらその間に君を５０回ぐらい殺せるね。夏はもっと早いのかも知んないけど、それを加味しても遅いと思う。
それと、打つ時の振動が結構体の負担になってるねぇ。柔軟する事をオススメするよォ……ってなんか反応してよ！」
一人でべらべら喋ってたら、ただの変人じゃないか！
折角人が勉強教えてくれたお礼に個性分析と、これからの戦闘時の為の改善点を３つも言ってあげたんだから。しかも、無料で！無料で!!

「――――ヨムキ、これからも勉強見てやるクズが！」
おぉ?!!?!
なんか半ギレ気味に言われたァー!!
そして、名前呼ばれたァー！これはコレはもしかして認められた奴?!来たァー!!くっそ嬉しいよォー!!
で、これからも勉強見てくれるってことは、「これからも個性の分析よろしくお願いします、報情様」って言ってるのと同じだね！……個性使わなくても分かるね。

だから、私が言うべき返答は、

「もちろんだともォ！」

しかないね。

こうやって、私と爆豪勝己の雄英高校受験に向けての準備がはじまった。

☆☆☆☆☆

なんだかんだあったけど、受験まであと3ヶ月になった。

あれからほぼ毎日、私は勉強を教えて貰い、そのお礼に爆豪勝己の個性分析をするということを続けていた。

お陰で、先週受けた模試の判定がAになった。私頑張った。凄く。

彼、教師に向いてないね。暴力あり、爆破ありの超スパルタ教育だもの。

「てめぇ、それ四日前も間違ってたぞ。この学習しない脳味噌クソが！」

地味に自分の記憶能力自慢しつつ、爆発とともに怒られるし。あと関係ないけど罵倒のボキャブラリー本当増やした方がいいと思う。

日も短くなり、息の白が目立つ、暗がりの中。

現在、午後7時。個性練習（爆豪勝己だけ）が終わっての帰り道。

「なんか、今中学生の拉致が増えてるらしいよ？しかもこの辺じゃん。私達も気を付けないとね

……いや、君は大丈夫そうだな」

「ア”？」

「いやぁ、鏡見てみなよ。見事なヴィラン顔だろぉ？むしろ、仲間だと思われて、犯行に協力要請されそう！アハッ!!」

「てめぇ、もういっぺん言ってみろ、殺すぞ!!」

「言ったら殺されるじゃん!?」

「言わなくても殺す、今度こそ殺す」

いやぁー。ヒーロー志望の友人にこーろーさーれーるぅー。洒落にならんわ。

――――だから、私は気がつかなかったんだ。今、この瞬間、盛大なフラグが立っていたという事に。

☆☆☆☆☆

「はぁ、はァ、ハァハァ！」

「ほぉらぁー逃げないでぇねぇ!!」
私、報情読気。目下フラグ回収中。
中学生誘拐犯と思しきヴィランから全力で逃走しております。
「やばいやばいやばい」
男は楽しげに、私を逃がしている。
足が痛い。もう15分は走ってるのではないだろうか?喉から血の味がする……息も限界だ。もう止まってしまいたい。自慢じゃないけど本当運動は無理なんだ!
「ほらぁ、もう限界だろぉ?大人しく捕まりなぁ!!
大丈夫、痛いのは一瞬だけさ!優しく殺して上げるからねぇえ!!
いや、そのすばしっこい足を切り落としてから殺す方がいいかもねぇえ!!」
男は狂いながら私を追い詰める。
優しく殺すってなんだよォ。もう殺されるのは充分だよォ!
「やばいやばいって、本当に殺される――まだか?!」
「ほらほらぁー早く諦めなぁあ!!」
男はだんだん距離を詰めてくる。
こっちはもう走れないってのに、あっちは余裕だ。
逃げろ、足よ動け、大丈夫、そろそろ、もうすぐ、おそらく、きっと、

「痛っ!!」

痛い痛い。転んだ?!なんで?!歩けない歩けない?!!足挫いたんだ。どうするどうする?!!

男は徐々に近づいてくる。

ズルズルと足を引きずり、出来るだけ男から逃げる。でも、そんなのは全く意味をなさなくて、

「おわりかぁーいいい!?」

男は私を捕まえた。

遂に、追いつかれてしまった。

手に持ったナタを月明かりに煌めかせながら迫ってくる。狂気に染まった瞳で、笑顔で。微笑みながら。

嫌だ嫌だ嫌だイヤだイヤだイヤだ近づくな離れろ私に触るな!!

その男の顔が前世最後の記憶を甦らせる――恐怖――――落ち着け!――怯え――

―冷静になれ私!!――――死――――大丈夫、ちゃんと計画的に逃げたじゃないか!

パニクる感情を必死に抑える。

「大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫、ちゃんと情報どおりならここを走ったから来るはずなんだ――――――

――――一陣の風。

瞬き1つぐらいの時間。気が付いたら私に迫ってきた男は白い紐でぐるぐる巻きにされていた。

「はい、捕縛。

獲物に集中し過ぎ、相変わらずヴィランは不合理の塊だね」

――――ヒーローが、ね」

ほら、ちゃんと来ただろォ。

さすが私、情報網に抜かりはなかったね。

☆☆☆☆☆

「この時間帯、この道がヒーローの巡回経路になっている事は知っていたけれど、まさか貴方だったとは……相澤先――――じゃなくて、イレイザー・ヘッド」

「俺を知っているのか？」

意外だと言わんばかりの声。まぁ、貴方、メディアに出ることほとんどないですもんね。そりゃ、情報流れないわけですわ。

だが!!私を舐めてもらっては困る!!

「えぇ、もちろんですともォ！

ヒーロー名、イレイザー・ヘッド　。本名は　相澤消太。個性は『個性抹消』相手を凝視する事で発動、瞬きをすると解除される。

１１月８日生まれの身長１８３ｃｍ、３０歳。血液型はＢ型。雄英高校の男性講師……ですよね？」

「……よく知っているな」

ちょっと引いてる。あれだ、ファンが熱烈過ぎてどう対応していいか分からないアイドルっぽくなってる。

今はこれぐらいでやめたけど、まだあるよォ。

未来の話だけど１―Ａクラスの担任。通常時の外見は長髪に無精ヒゲのくたびれた

男性。合理的であることを尊び、時間の無駄を嫌う。あと、プレゼント・マイクと同期でもあるね。

まぁ、この辺言っちゃったら、流石にアカンから心の中だけで呟いとく。

原作情報含め、この世に生まれ落ちてからも必死に情報収集したからね！……猫好きってわかった時はその意外性に噴き出したよ。

「怪我は？」

「あります、足捻りました。めちゃくちゃ痛いです。立てません！」

「軽傷だな」

めっちゃ痛いけど、意識不明の重体にならない限り、骨折れても、手足もげても、軽傷なんだよなぁ。

イレイザー・ヘッドはどこからも無く取り出した包帯をこちらに渡してくる。……自分で巻けと？

「警察には既に通報してある、辛いだろうが犯人特定の為の事情聴取に同行をお願いする」

「そう来ると思いましたよ。めんどくさいんで、情報あげます。だから帰りますよォ。

えーと、犯人の名前は『追込強太』。個性は『追い込み』人を追い込む時のみ運動能力が通常の１０倍となる……よく逃げれたなぁ、私！

あと犯歴か。……ふーん。へぇ。コイツ誘拐を初めて３年目らしいですねぇ。それまでに男女含め１４人（全て中学生）を誘拐し……それぞれの方法で殺しています。

――――とっ、これぐらいわかればいいでしょう？正直、これ以上コイツの頭見ていたくないんですけど……」

「情報分析の個性持ちは一定多数居るが…お前は凄まじいな」

私は犯人から手を離し、手袋を嵌める。

私の個性は触れているものから無条件に情報を読み取ってしまう。サイコメトリーの感覚共有が無い劣化バージョンみたいなものだ。

だから常に手袋を嵌める。手袋の情報は常に入ってきてしまうが、しないより入ってくる情報量はずっと少ない。

手袋なしで、お金でも触ってみろ！誰が触って何をしてるかまで情報を読み取ってしまってみろ！手袋なしではお金使えなくなるぞ!!

「あと、これからある人と約束があるんで帰りたいんですけど」

「それは駄目だ」

「猫好きという情報をヒーロー交流サイトに流してもいいですか？猫を撫でている写真付きで」

「わかった、気をつけて帰れよ」
凄まじい手の平返しだなぁ。そんなに猫好き知られたくないのか？……これは弱味と言っても差し支えないよねぇ？アハッ。いい情報ゲットだぜ！
「はい、助けて頂きありがとうございます。この恩はそのうち仇で――間違えた。普通に返します」
「……返さなくていい。ヒーローが人を助けるのは仕事だ。金は国から貰っている。それに助けたやつから一々恩を返してもらっていては時間がかかり過ぎる、非合理的だ」
「それもそうですが……ふむ。まぁ、いっか。
これ以上会話で得れる情報無し、かなぁ。
そろそろ予定も押してるし、イレイザーヘッドさん、さようならぁ」
「ああ」
足を捻ってしまったため、ひょこひょこと何とも間抜け感じでその場を離れた。
その後、イレイザー・ヘッドが猫好きな噂がネット上で静かに囁かれたとか囁かれてないとか……

私、報情読気。運動苦手系女子。ヴィランに追いかけられ、ヒーローに恩を作りつつ

元気に生きてます。

第５話

「やぁこんにちは！今日はお互い頑張ろうねっ!!」

「えっ?!あっ……そうですね?」

はい。皆様、お久しぶりです。色々ありましたが本日、ようやっと受験日当日。

私は現在、白い息で眼鏡を曇らせております。そう、なんと私最近、視力の低下により、眼鏡デビューを果しましたァ！

……まぁ、有り体に言えばスマホ等の画面の見すぎという情けない理由でかけることになったんだけどね。

そして今は、雄英高校校門前で、通り過ぎる受験生に片っ端から声を掛け、握手や、頭を撫でるなど身体接触により、片っ端から個性をかけまくっているよぉ！

もう、１００人ぐらいは私の術中にハマってるだろうね。アハッ！

――――『君は何故か入試テストに集中出来ない』ってね。

何故そんな事を必死でやるかって？

理由は単純ですよォ。平均点をできる限り下げ、私が合格しやすくするため!!

ズルい？酷い？セコい？……バカバカしい。全ては結果次第。誰がなんと言おうと、勝利（合格）した者が正義なんだよォ？

「全ては負け犬の遠吠え！私に触れたのが運のつきだねぇ！」

それに、雄英は〝自由〟な校風が売り文句。つまり、入試試験だって自由に各々の力で合格したっていいってこと。

――誰が、試験だけで純粋に勉強して、努力して合格しろと言ったァ？

――誰が、試験会場までの道のりで『個性を使ってはいけません』なぁんて言ったァ？

「つまり、試験はもう始まっているんだよォ!!

無知ってほんとに愚かだねぇー!!そして私は天才だァアッハッハッハッハッ!!」

「うるせぇ、俺の前に立つなブッ潰す」

「あいたっ！」

頭叩かれた。なんだよォ、折角人が悦に入ってる時に。

……っておい！頭揺さぶるなよォ、ただでさえクシャクシャな髪がもっとぐしゃぐしゃになるじゃないか！……っておい！そのまま通り過ぎないでよォ!?

「何がしたかったんだ？

……ってあれ？あの縮れ毛は緑谷出久君？」

何故か口を押さえて立っている。
「どけデク!!」
「かっちゃん?!」
「俺の前に立つな殺すぞ」
その文句、さっき私に言ったのと殆ど変わってなくね？
「おっ、お早う！頑張ろうねっ、お互い……」
めっちゃ震えてるし。そして爆豪勝己は言うことだけ言ってそのまま行っちゃったし。
流石に可哀想だねぇ。
「うん、頑張ろぉ！緑谷出久君も頑張ってね!!」
「えっ?!ほっ、報情さん?!」
だから、声をかけてあげた。うん、たまにはいい事しとかないとね。最近チンピラヴィランがたむろってる場所をヤバそうな組織に教えたり悪い事ばっかやってるからね。
ちゃんと、徳積んでおかないと。
結構受験生潰せたし、さっさと会場に入っちゃうか。
私はありえないぐらい足がブヨブヨ震えてる緑谷出久を置いて試験会場に向かった。

――――遂に、私の雄英高校入試が始まるのだ。いや、もう始まってたわ。

☆☆☆☆☆

「今日は俺のライヴにようこそー!!!エビバディセイヘイ!!!」
「ＹＯＫＯＳＯ(ヨーコソー)!!」
おぉ!プレゼント・マイクの生掛け声だァ!チケットの倍率高すぎて、１回もライヴ行けなかったんだよなぁ!
もうこれは全力で返答するしかないっしょ!ノリノリだぜぇ!!
「おっ!可愛い受験生のリスナーちゃん!元気な返しサンキューー!!!
他のリスナーのミンナも盛り上がっていこーぜーー!!!
「それじゃ、実技試験の概要をサクッとプレゼンしてくぜ!!アーユーレディー!?」
「ＹＥＡＨＨ(イヤー)!!」
「ボイスヒーロー『プレゼント・マイク』だすごい…!!
ラジオで毎週聞いてるよ、感激だなぁ。雄英の講師は皆プロのヒーローなんだ」
「うるせぇ」

「あいたっ！足蹴んないでよォ！……緑谷出久君だってうるさいじゃないか！なんで私だけぇ？暴力反対！

……昨日試験への緊張で眠れなくて寝不足なくせに！」

全く、すぅーぐ足出す、手出す、爆破するぅ。

「なんだとゴラ！」

「あっれぇー？図星ぃ？

まさかホントに寝れなかったのォ？意外と君ってば繊細なのね」

ギャーギャーと言い合う私達。そこに――――

「ついでに、そこの3人組！

先程からボソボソ、ギャーギャーと…気が散る!!

物見遊山のつもりなら、即刻雄英から去りたまえ！」

前方の方に座っていた男子が私達に向かって注意する。

「すみません…」

「ごめんねェ」

「チッ！」

って彼は、愛すべき眼鏡の皆んな大好き真面目系委員長の、飯田天哉君じゃないか！

そんな彼に注意されるなんて……感激だ!!

でも、なんだろ、あれだね。謝り方って結構その人の性格出るね。

「オーケーオーケー受験番号７１１１君ナイスなお便りサンキューな！

４種目の敵（ヴィラン）は０Ｐ！そいつは言わばお邪魔虫！……」

プレゼント・マイクによるテンションの高い説明は続く。この辺は原作で知ってるからね。聞かなくてもわかるね。

……とっ、そろそろ名言来るね。私は話もそこそこにスマホの録画をセットする。

「俺からは以上だ!!

最後にリスナーへ、我が校の〝校訓〟をプレゼントしよう。

かの英雄ナポレオン＝ボナパルトは言った！

『真の英雄とは人生の不幸を乗り越えて行く者』と!!

〝Ｐｌｕｓ　ｕｌｔｒａ!!〟!!それでは皆（みんな）良い受難を!!」

『Ｐｌｕｓ　ｕｌｔｒａ!!』名言来たァー！くぅー。シビレるぅ!!

……うん。ちゃんと録画も出来てるぅ。はぁー、幸せだなぁー。憧れのヒロアカの世界の名言を生で聞けるなんて！

本当、自称神、転生させてくれてありがとォ!!

☆☆☆☆☆

ところ変わって、入試会場前。

何故か同中にもかかわらず、緑谷出久と同じ会場になった。

爆豪勝己は盛大な舌打ちをしながらボソッと「てめぇを潰せねぇじゃねえか」言っていた。緑谷出久と2人で震えた。この時私達の心は強く結ばれていたと思う。

それは兎も角、この試験会場漫画でも、広いと思ったけど、実際ほんとに広い。馬鹿でかい。馬鹿みたいに金かかってんだろぉーなー。

そんな、ビルの並ぶフィールドを見て受験生たちは、精神統一したり、ひたすら感動したりしている。緑谷出久は何故か飯田に注意されてる。原作通りなら、麗日お茶子に話しかけようとでもしたのだろう。

私？私が何をしているかって？そんなの決まってるじゃないか！――――監視カメラのハッキングだよォ。

しかし、流石雄英高校、フィルタリングが硬い固い。ショッピングモールの監視カメ

ラぐらいなら秒で入れるのに。さっきからやってるけどダミーが多くて時間かかるっ！

……けど出来なくはないね。

「よし、オーケー！やっと出来た!!」

ふぃー。久しぶりだよこんな時間かかったの。まぁ、始まる前に終わってよかったよかった。

ん？これは、個性関係ないよ？

純粋なハッキング能力。前世から合わせて約２０年ずーっとやってきたんだ。舐めないでほしいね！

大抵のものならハッキングできるよォ？

まぁ、流石に雄英高校の入試結果とかは出来ないけど。そのうちそれぐらいは出来るようになりたいなぁー。

「ハイ、スタート」

よし、カメラ映像２５０台全てクリア。……ボチボチ行きますか。

私はタブレットＰＣ片手に歩き出す。走るとコケるからね。

ん？誰も来ない？……あーそっか、原作でもそういうシーンもあったねぇ。

「どうした?!
実戦じゃカウントなんざねぇんだよ!!走れ走れぇ!!
賽は投げられてんぞ!!!」
その声とともに我に返った受験生達が後ろから来る……こっわ。さっさと路地入ってしまおう。

「「標的捕捉!!ブッ殺ス!!」」
カメラ情報通り、４Ｐの敵２体！完全背後も取れた。
手袋は既に外してある。指先が触れた――――
――――個性発動。『情報操作』

「君の敵は３Ｐだよォ！私の駒となり、ポイントを取り尽くしてくるがいい!!」

４Ｐの敵はちゃんと標的を受験生では無く、３Ｐにして銃などをぶっぱなしている。
これで、私がポイント稼ぎにあの野蛮極まるギミック共と戦わなくともいいわけだ。
「情報を操る者、大局をも操るぅ!!この会場全てのカメラ情報が見える私に、死角は無しぃ!!」

アッハッハッハッハッ!!
いやぁー、気持ちいいわぁ。……よし、次はレスキューポイントも稼がないとね。原作情報が役に立つ役に立つ。本当、転生ってチートだよなぁ。
そう思いつつ、カメラに表示される受験生達から怪我人を探す。まぁ、こんな危ないやつが所狭しと暴れ回るんだ。負傷者だらけだね。
「はぁーい、怪我してますねぇ、治療しますねぇ」
私は準備していたバッグから救急セットを取り出し、手際よく怪我の処置を行っていく。
それが終わったら、またカメラ映像を見て、負傷者を探し、治療に向かう。もちろんギミックにかち合わないルートで、だ。……１Ｐでも正面から戦ったら確実に負ける。私は戦闘に関して言えば物凄く弱いのだ!!
大体、１０人ぐらいの怪我を治していた所だろうか、突如地面が揺れた。慌ててカメラ映像を確認する。
「圧倒的脅威、０Ｐギミックのお出ましか！
こうしては居られない！さっさとスマホ持って緑谷出久君のＳＭＡＳＨを撮影せねば!!」

私は大急ぎで、ＯＰギミックを追いかける。
あれ？これ正面から見ると恐ろしいけど後ろを追いかけるように走ってるぶんには安全なんだねぇ。
皆逃げてる逃げてる。頑張れー。私はその様子を後ろからカメラで撮っておいてあげよぅ――――敵から逃げる未来のヒーロー達、ってね！
「まっ、あんなのに勝てる訳ないし、何よりＯＰだしね。当たり前の行動か」
私だったら絶対逃げるしね。味方囮にしてでもチョー逃げる。誰だってけがしたくないし、死にたくない。
……でも、

「いったぁ…」
１人の女の子が降ってきた瓦礫で足を潰されており、逃げられないようだ。あれは麗日お茶子だね。ここも原作通り、と。
何にせよ、このままだとＯＰギミックの進行により踏まれてしまうだろう。
「だけど、それがなんだ。倒すメリットは一切無い、私だったら確実に見捨てる」

……でも、主人公（ヒーロー）は違う。

……例え敵わない敵だろうと、例えまだ1ポイントも取っていなくとも、それでも尚、一切の躊躇なく！彼はただ1人駆けるんだ。

「――――だからこそ色濃く、浮かび上がる時がある」

ＳＭＡＳＨ!!!

圧倒的脅威は1人の少年の、1つのパンチにより瓦礫の山となった。

「ほんっと、カッコ良すぎだよォ！

漫画で知ってたけど、リアルはヤバイわァ！」

しっかりとそのシーンを撮ったスマホを握りしめ、緑谷出久が上空から落ちて来るのを眺める。

「「終ー了!!!!」」

程なくして、終了の声がかかった。

緑谷出久は地面に平伏している。泣いているのだろうか？……そりゃ、そうか。1ポイントも取れなかったのだから、当然、不合格なのだから。

私は知っている。彼がちゃんと合格し、雄英高校の生徒となる事を。だから、

「緑谷出久君、君はこの場の誰よりもヒーローだったよ」

合格するっては言えないけど、これくらいは許されるだろう。私を感動させるまでの情報をくれたお礼だ。……既に気絶してて、聞こえなかったかもだけどね。

☆☆☆☆☆

そんなこんなあって、入試試験は終わった。

名言も撮れたし、緑谷出久君の勇姿も撮れた。監視カメラ映像は容量が大き過ぎて全てを保存することは出来なかったけど、1年Aクラスの皆の様子は全て保存した。ハッキング頑張った。

それから、瞬く間に1週間が過ぎさり、雄英高校からの通知が手紙に入って来た。

――――ちゃんと合格だった。オールマイト映し出された時はびっくりした。

筆記はギリギリで合格。何故か今年は合格点が毎年より低かったらしい。……何のことかわからないなぁー。実技試験は合計４７ポイントで１２位通過だった。

「……えっ？配属クラスＡ?!

砂藤力道君がいなくなってる?!はっ?!」

はっ?!

私は慌ててスマホを取り出し、ある物を検索、調査、確認する。

「……砂藤力道君がＢ組になってる。落ちた訳では無いにしても……うわぁ。ごめん！ほんっと、ごめん!!」

でも、私がＡ組かぁー！登校初日の体力測定しかり、ＵＳＪしかり！主人公達を間近で見れるじゃないか!!

「ヤッホオオオオオオい!!登校日が楽しみだなぁー!!」

私は１人、家で叫んだ。

☆☆☆☆☆

――――春。ドキドキワクワクの高校生の始まり!!

雄英高校１年Ａ組。

担任、相澤先生の合理的判断により、入学式、ガイダンスをすっ飛ばし、個性把握テ

ストを行うことになった。

――――――――そこに、報情読気の姿はなかった。

第６話

「いやぁ、流石雄英高校！金かかってんねぇー。
監視カメラの数がおかしいぐらい多いっ！」
はい、皆様おはようございます。今日から雄英高校１年生の報情読気（ほうじょうよむき）です。
現在時刻１０：１２。登校初日から余裕で大遅刻してますよォ。
うん。私も流石に初日から寝坊するとは思ってもいなかった。自分に自分でビックリ。
「でも焦らない、焦らない。落ち着いてまずはグラウンドに行こう」
学校案内の手紙に入っていた地図を取り出し、ゆっくりと歩き始める。……流石雄英、グラウンドが何個もあるねぇ。
どれだろぉ？取り敢えず右から攻めてくか。
１つ目のグラウンドに向かって歩いていくと……
「そうさ緑谷少年！私は彼と……ウマが合わないぞ!!」

「……オールマイト？」

人気Ｎｏ．１ヒーローがいた。頭だけを建物から出しており、思いっきり、ストーカーの体勢だった。そしてブツブツと何か言っていた。正直、直視し難い現状だ。

そして、オールマイトの熱心な視線の先を辿ってみると、どうやら緑谷出久君がボール投げをやっているらしい。

……ってあの原作でめちゃくちゃカッコイイシーンじゃないか！――――スマホカメラセット!!

カメラをズームしてはっきりと見えるようにする。音声も少しなら拾えそうだ。

ボール投げ２回目、緑谷出久は腕を大きく振りかぶる!!

「おいおいマジか!!」

オールマイトが叫んでいる。ちょっとうるさい。

ＳＭＡＳＨ!!――――記録７０５．３ｍ

「先生……！まだ……動けます」

いや、もうほんとイケメン過ぎて辛い。因みに記録はイレイザーヘッドが持って居るスマホ（計測器）に接続して読み取ったやつだよォ。

「心配になっちゃって来たけど…なんだよ少年!!」
「力の調整はまだ出来ないみたいだねぇ！でも、行動不能になるわけにはぁいかない！」
「そう、ならばと緑谷少年は、ボールを押し出す最後の力…
　指先のみにワン・フォー・オールを発揮させた!!」
「最小限のちからでェ、最大限の力を…」
「なんだよ、少年！」
「なんだよォ、主人公（緑谷出久）！」
「「かっこいいじゃないか!!!」」

　オールマイトと私の台詞が、完全に今一致した。
　おっさんと２人、一緒になって感動してしまった。それだけ、緑谷出久はかっこよかった。
「……って!!?
　自然過ぎて普通に会話してたけど!?君ぃ!!もしかして遅刻してる生徒じゃないか?!」

あっ、やっと気が付いたのか。返答したいけど今は……

「爆豪勝己の顔やべぇー。写真撮っとこ。

……うんうんわかるよォ。その驚き！無個性だと思ってた人間が急に個性使うんだもんねぇ」

「君!!聞いてるかい?!」

「おぉ!!爆豪勝己が緑谷出久に向かって突進！

すかさずイレイザーヘッドが止める!!

今の聞いた?!『んぐぇ!!』だってよ！んぐぇ！ほんっと、顔やべぇ面白すぎィ!!

……それにしても、イレイザーヘッドが個性発動する時に目ェ紅くなんのカッコイイなぁ」

「……聞いてない事がよくわかったぞ!!…先生って難しい…」

「聞いてますよぉー、無視してるだけで」

「なんで!?ヒドイっ!!」

「あぁ、すみません。もう大丈夫です。オールマイトですよねぇ？

……ファンの友人です！サイン下さいっ!!!」

「話が急展開過ぎてオジサンついていけない!!!」

なんでぇ？オールマイトに会ったら、先ずはサイン、その後握手って決まってるん

じゃないの？

ついていけないと言いつつも、オールマイトは差し出した色紙にサインしてくれる。

「わぁ、ありがとうございます！」

やったね。これで、嫌がらせのバリエーションがまた１つ増えたぜ。

「で、話を逸らされ続けたけれど！君!!遅刻少女だよね!?」

「いかにもぉ！現在進行形で遅刻してますが何か？」

「コラコラ!!開き直らないで相澤くんの所に行きなさい！そこにいるから！」

「オールマイトだって教師なのに一人の生徒に肩入れして仕事サボって見に来てるじゃないですかァ?!」

「グッ!!そこをつかれると痛いっ!!」

お腹を押さえて呻くオールマイト。いちいち動作が大げさだ。

それを横目に私はもう１台のスマホを取り出し、ハッキングをはじめる……相変わらずセキュリティガチガチだなぁ。

雄英高校は有名な割にチョー秘密主義だから今の今まで、学園内全ての地図すら手に入らなかったんだよなぁ。

とりま、あとあと役に立ちそうなＵＳＪの地図は欲しいなぁ。同学年の普通科の人達の情報も欲しいし、二、三年生の生徒の情報も出来るなら見たい……やる事いっぱいだ。

「とっ、見ない間に最終種目の長座体前屈まで終わってるし?!時間経つのはっや！」

☆☆☆☆☆

「んじゃ、パパッと結果発表。

トータルは単純に各種目の評価点を合計した数だ。

口頭で説明すんのは無駄なので一括開示する

ちなみに除籍はウソな。

君らの最大限を引き出ｓｕ「おはよォうございますぅ!!」

「「誰!?!」」

「報情さんっ?!」

「チッ、やっと来やがったか」

「俺の台詞を…！」

いやぁ、結果表示される前に間に合って良かった良かった!!

あっ、イレイザーヘッドお久しぶりです、４ヶ月ぶりぐらいですかね。

ん?なんか皆んな凄い私のこと見てるな?

あぁ、突然来たもんね、そりゃ、注目しちゃうね！先ずは自己紹介か！

「えーと、出席番号１７番、報情読気！よろしくゥ！

知りたい事があったら、気軽に相談してね！１０００円から情報を提供するよォ！」
えーと。
なんだろうこの痛いくらいの沈黙。なんか私だけが空気読めてない感半端ないんだけどお。
「報情読気、個性把握テスト、遅刻により未受験の為……除籍」
「えっ?!ちょ、ちょっと待ってくださいよォ!!イレイザーヘッ――――じゃなくて相澤先生!!
遅刻には海より深く…もしかしたらマリアナ海溝よりも深い理由があるんです!!」
相澤先生行動が早すぎぃ！除籍とかそんな軽くするもんじゃないでしょ!!しかも声的に冗談じゃなくて、ガチで言ってるし。
もしかして、台詞遮ったこと根に持ってるんですかァ?
「理由(ワケ)?なんだそれは?」
「…オールマイトからサイン貰ってたんです！」
「……除籍だな」
「うわぁぁぁ、すみません！除籍だけは勘弁してください！ふざけてますよね、でも事実なんです!!
あっ、そうだ！個性把握テストを受ければいいんですよねぇ！

……ちょっとそのスマホ貸してください!!」

――――個性『情報提供』&『情報入れ替え』

「――――報情読気の個性把握テスト順位は19位である……っとこれでいいですよね！ほら！ここに私の名前があるってことは、つまり私は個性把握テストを受けたってことですよォ!!」

私は、個性把握テストの順位の立体映像をブンと映し出し、力説する。

こちとら除籍がかかってんじゃぁ！必死になるわそりゃ。初日から除籍とか洒落になんないぞぉ。

「……わかった、除籍は無しだ。だが後で職員室に来い。遅刻の反省文を書いてもらう」

「えっ？嫌ですよォ？」

「なら除籍な」

「速やかに行かせて頂きます!!」

相澤先生は言うだけ言って、オールマイトが居る建物の方に行こうとする。

そこに声をかける生徒……あれは飯田天哉だね。

「先生！本当に最下位除籍の件は虚偽なのでしょうか!?」

「あんなのウソに決まってるじゃない…ちょっと考えればわかることですわ…」

おぉ！八百万百じゃないか！実際に見ると……うん。大っきいね。何がとはいわな

いけど。
「そゆこと。これにて個性把握テストは終わり。
教室にカリキュラム等の書類があるから目ぇ通しとけ」
どうやら、これで今日の授業？は終わりらしい。もともと入学式の予定だったしね。
午前中で終わるんだね。

「報情さんっ！えっと、遅れて来たけど何かあったの？大丈夫？」
納得していると、緑谷出久君が保健室利用書片手に尋ねてきた。いや、大丈夫も何も
「ただの寝坊だよぉ。それより君の指の方が大丈夫？」
「そうだよ！早くリカバリーガールのとこに行った方がいいよ！」
被せるように言ってきたこの茶髪の女子は……麗日お茶子じゃないか！入試ぶりだなぁ。相変わらず可愛いなぁ。
「あっ、突然ごめんね。私、麗日お茶子！よろしく！読気ちゃんだよね？個性スゴいねえ!!」
「よろしくぅ。麗日お茶子君の個性だって凄いじゃないか。ボール投げの記録、無限だっただろう？」
「なんで知ってるの？まだ来てなかったよね？でも、ありがとう!!」

相澤先生が持ってたスマホハッキングして閲覧しました。……その純粋な感謝の言葉が胸に刺さるゥ！

そんなふうにもだえていると、男子生徒が私に話しかけて……いや、叱ってきた。

「君い!!初日から遅刻とは雄英高校生徒としての自覚があるのかね?!」

「おぉ！君は飯田天哉君じゃぁないか!!本当に全体的に四角いんだねぇー！」

「四角っ?!……だいたい君は、……（以下省略）」

いやぁ、ごめんよォ。原作漫画と画面ごしでは見た事あったんだけど、実際に見たら本当に四角くて思わず口から出ちゃったんだよ。

そして、話長いなぁ。

もう皆、さっき声かけてくれた麗日お茶子もいつの間にか、着替えにいっちゃってるじゃん。

うーん。細かい小言ばっかで聞くのめんどくさいし、サクッと終わらせるか。

「そう言えば、今日のヒーロー特集インゲニウムだったねぇ」

「っ?!……もしかしてそれは今日の9時に放送されている」

「そうだよォ。家で見てから来たんだ。戦闘シーンとかはあまりの解決スピードに拍手しちゃったよォ！」

「ぼ……俺も見たかったのに……羨ましい！」

「やっぱ、ターボヒーローのトップといったらインゲニウムだよねぇ」
「そっ、そうだろう!!…僕の兄さんは最高なんだ！」
そして、今度はそのかっこよさについて語りはじめる。
ちょろいな、飯田天哉。そして地が出てるぞ。おぼっちゃま隠してるんじゃなかったのかぁ？
少し褒めただけで自分がヒーローの弟である事漏らしちゃってるし。……皆これくらいちょろかったらラクなのに。
そんな事を思いつつ、私は職員室に向かった。
私はそもそも体育着着てないから、着替える必要もないしね。
もちろん、飯田天哉は放っておいた。そのうち我に帰るでしょうよ。

☆☆☆☆☆
「反省文『遅刻してすみませんでした』……これ以外に何書けばいいんですかァ？」
現在、反省文を相澤先生の目の前で作成中。
「その遅刻した原因と今後しない為の対策」
「原因と対策ぅ？」
原因は寝坊と、その他色々。対策は……意味無いね。だって私これからも遅刻する気

満々だし！

前世から学校は遅刻しまくってたし。寧ろ遅刻する時間が私の登校時間的な？

「うーん、今後活用されることの無い対策を渡すよりだったら……」

いいこと思いついた。折角だからここに書いといてあげよう。

私はそう思い、ペンを滑らせ始めた――出来た。

早速相澤先生に提供する。

「……お前、これは……！」

「はい、校門の監視カメラの死角情報です。

私が無駄な対策立てるより、有益な情報を渡した方がいいでしょう？

……もう帰っていいですかねぇ？これ以上一人の生徒に時間をかけるのは非合理的ですよね！

では、さよならァ！」

そう言ってさっさと職員室を出た。

書類あるって言ってたし、とりあえず教室に行くか。

☆☆☆☆☆

教室。

原作どおり、扉がめちゃくちゃでかかった。

そして、なんと私の席は爆豪勝己の後ろだった。嫌だなぁ、だって彼机に足上げるから、その足がいい感じに黒板を見えなくするんだよねぇ。まぁ、出席番号順だから、そうなることはわかってたんだけどさぁー。

あっ、因みに後ろは緑谷出久で隣は瀬呂範太だった。

ふと、窓から下の校門を見てみると、麗日お茶子、飯田天哉、緑谷出久が見えた。……原作どおりなら、デク宣言でもしているのだろう。あの赤い顔も撮りたいけど、流石にここからじゃ遠すぎて無理か。

「で、なんで君は残っているのかなぁ？既に皆、帰ってるのに」

「撫でんな殺すぞ！」

私はいつものように爆豪勝己の頭を撫で、感情情報を読み取っていた。

だって彼の思考回路面白いんだもの。爆発的に自己中心的で、真っ直ぐで……とても好ましいんだよねぇ。

「ふむふむ――――緑谷出久君の個性の事か！」

「読むなクソが！」

「うーん。今言えるの確かな事は――――緑谷出久は君を騙すほど勇気も無いし、君に

対して不誠実でもないよォ？
まぁ、そんな事明日にはわかるんだから考えていたって時間無駄だよォ？
それよりだったら、友人らしく私と共に帰路につこうじゃないかァ！」
私は手袋を嵌めながら爆豪勝己を誘う。
「断ったらまたなんかすんだろ……行くぞ」
「もちろんだともォ！」
よくわかってるねぇ。君の思っている通り、もし断ったら、君がとても欲しがっていたオールマイトのサインを、君の目の前でビリビリに破く予定だったよォ。

☆☆☆☆☆
「ギリギリセーフ!!」
「いや、余裕でアウトだぜ！俺の最初の授業から遅刻！こいつぁシヴィー!!」
はい、おはようございます!!現在時刻１１：４２！４時間目の授業、英語の真っ只中！昨日の今日で遅刻してる報情読気だよォ。
「セーフって言うのは、ヒーロー基礎学にってことです」
「これまたシヴィー!!とりあえず座ってくれ！授業を再開するぜ!!アーユーレディー?!!」

「オーケー!!」
あと、今日のヒーロー基礎学は緑谷出久と爆豪勝己の熱い戦いだからねぇ!こりゃ見ないとあかんでしょ!!
そんな事を思いつつ、プレゼント・マイクによる英語の授業を受けた。……叫び過ぎて喉が痛い。

☆☆☆☆☆
午後。ついにヒーロー基礎学の時間だ。タブレットＰＣの充電１００、スマホの充電３台とも百パー。撮影＆ハッキング準備は万全だ!!
昼食はＩＮゼリーを胃に流し込んだ。最近こんな食事ばっかだ。ちゃんと温かい家庭の料理が食べたいなぁ。
「わーたーしーがー!!」
皆憧れの人気Ｎｏ．１ヒーロー、オールマイトの声。途端に教室がザワめきはじめる。
「普通にドアから来た!!」
至って普通にドアから入ってきた。
昨日も見て思ったけど、本当に画風が違うんだよなぁ。漫画の表現かなって思ってた

んだけど。実際に見てもそう思う。……雰囲気とかが関係あるのかな？

「ヒーロー基礎学！

ヒーローの素地をつくる為、様々な訓練を行う課目だ!!

早速だが今日はコレ!!戦闘訓練!!!」

戦闘訓練かぁ。皆ワクワクしてるなぁ。戦いはヒーローの華だもんねぇ。私は嫌いだけど。

戦いはない方がいいじゃないか。誰も傷付かなくて……平和主義者を謳う、運動したくない主義者の私は思う。

「そして、君達のコスチューム！」

「おおお!!!!」

私のコスチュームかぁ。ちゃんと要望どおりに出来てるかなぁ！戦いは嫌だけど、戦闘服は楽しみだ。

「着替えたら順次、グラウンド・βに集まるんだ!!」

「はーい!!!」

皆、自分のコスチュームを手に持ち、我先にと更衣室に向かっていく。それを眺めながらオールマイトが言っている。

「格好から入るってのも大切な事だぜ少年少女!!

自覚するのだ!!!今日から自分は…
ヒーローなんだと!!」

……ヒーローかぁ。私、ヒロアカのストーリーを間近で見る為だけにこの高校入ったからなぁ。うーん。その辺もこれから真面目に考えてかないとね。

☆☆☆☆☆
着替え終え、皆と一緒に体育館入口に集合する。

「さぁ始めようか有精卵共!!」

――――波乱のヒーロー基礎学がいよいよ始まろうとしていた。

第７話

「始めよう有精卵共!!戦闘訓練のお時間だ!!!」
はい。皆様こんにちは!!ただ今ヒーロー基礎学始まったばかり。皆のコスチュームが色んな意味で最高。
「要望ちゃんと書けば良かったよ…パツパツスーツんなった。……はずかしい」
麗日お茶子くっそかわいすぎかよ!!
私のスマホシャッターが火を吹くぜぇ!様々な角度から撮りまくる。
他の生徒も満遍なく撮っておく。……八百万百は色んな意味でやべぇ。
カシャカシャを撮影しているとブドウ頭の……峰田実がグッドサインを出しつつ話しかけてきた。
「ヒーロー科最高」
「それな……!」
「その写真オイラにも譲ってくれ」
「１枚２００円から」
「２０枚女子、アングル下で」

「毎度ありぃー」
商談成立。峰田実、彼はいい客になりそうだ。
「読気ちゃんのコスチュームはなんて言うか……私服？」
「そうだよォ、情報収集すんのに目立つ格好は出来ないからねぇ！」
私は尋ねてくる麗日お茶子に答える。
私のは戦闘服では無い。ワイシャツにベストセーター、短パン、腰巻状のスマホ収納袋、武器は辛うじてゴム弾入りの銃があるぐらいだ。……だって戦闘する気ないからね。弱いし、出来れば動き回りたくないし！

「先生！ここは入試の演習場ですが、また市街地演習を行うのでしょうか?!」
「いいや、もう２歩先に踏み込む！屋内での対人戦戦闘訓練さ！」
うん。知ってた。アメリカ設定のあれでしょ。
「監禁・軟禁・裏商売…このヒーロー飽和社会――ゲフン
真に賢しい敵（ヴィラン）は、屋内に潜む!!」
……。
……私のこと言ってるんじゃないよねぇ？
屋内電話１本サイバー犯罪（情報収集）＆裏商売（情報提供）やってる身としては結構ビビる話だなぁ。気を

つけよォ。
「君らにはこれから『敵組』と『ヒーロー組』に分かれて2対2の屋内戦を行ってもらう!!」
「基礎訓練も無しに?」
「その基礎を知る為の実践さ!!
ただし、今度はぶっ壊せばオッケーなロボじゃないのがミソだ」
確かに、生徒ぶっ壊したらただの殺人だもんね。
「勝敗のシステムはどうなります?」
「ブッ飛ばしてもいいんスか」
「駄目と言われても君はブッ飛ばすよねぇ?」
「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか……?」
「分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいですか」
「このマントヤバくない?」
「んんん〜〜聖徳太子ィィ!!!」
先生なんだからこれぐらいは読み取れないと。
私だって5人ぐらいなら同時に喋っても読み取れるぞ。
……まぁ、まだ新人だしね、頑張れオールマイト!!

「いいかい!?状況設定は『敵』がアジトに『核兵器』を隠していて『ヒーロー』はそれを処理しようとしている！」

カンペ取り出して読み始めた。カンペちっちゃ！違うか、オールマイトがでかいのか？

『ヒーロー』は時間内に『敵』をこの確保テープで捕まえるか、『核兵器』を回収する事。『ヴィラン』は制限時間まで『核兵器』を守るか『ヒーロー』を同じく確保テープで捕まえる事。制限時間は１５分だ!!」

ふむふむ、なるへそー。絶対にヒーローにはなりたくないな。どう考えても不利だし、兵器を探す、室内侵入、……やる事が多い。

その点ヴィランは核兵器を１５分間守るだけでいい。

そう思いながら、用意されたクジを引く。

――――Ｆ。口田甲司と一緒か。

他は原作どおりの組み合わせみたいだね。

と、なると……最初の組み合わせは、

「Ａコンビが『ヒーロー』、Ｄコンビが『敵』だ!!」

Ａコンビは緑谷出久と麗日お茶子。

対してＤコンビは爆豪勝己と飯田天哉。
まぁ、緑谷出久ＶＳ爆豪勝己の因縁の戦いだねぇ。

☆☆☆☆☆

「飯田少年、爆豪少年は敵の思考をよく学ぶように！
これはほぼ実践！怪我を恐れず思いっきりな！度が過ぎたら中断するけど……」
私含め、戦わない生徒達は地下のモニタールームに移動する。
「さぁ君たちも考えて見るんだぞ！」
ビルの至る所に設置されたカメラ映像が壁一面に映し出される。
緑谷出久君達がビルに潜入。だが間を置かずに……
「いきなり奇襲?!」
爆豪勝己の奇襲。緑谷出久はそれを辛うじて避ける。うーん。やっぱ音がないとつまんないなぁ。会話も聞きたいし……
「爆豪ズッケぇ!!奇襲なんて男らしくねぇ!!」
「奇襲も戦略！彼らは今実践の最中なんだぜ！」
「緑くん、よく避けれたな！」

うーん。こっちから行けば音声だけすぐに取れるか？

『――――されー――――程度に――――たらぁ!!』

音が飛ぶなぁ。もうちょい精度上げて……めんどくさいから通信機器ごとハッキングしちゃうか！

私はタブレットＰＣと、スマホを出して操作する。

いぇーい。２台同時操作ァ。

『――――〝「頑張れ!!」って感じのデク〟だ!!』

あっきたきた。うわぁ、一本背負い見逃しちゃったなぁ。……後でカメラ映像見とくか。

『爆豪くんめ！勝手に飛び出してしまった…

なんなのだ彼は！もう!!!!』

飯田天哉君頑張れ。彼、これからもっと暴走するから。

『ムカツクなああ!!!』

『オイ爆豪くん!!状況を教えたまえ！とうなってる!?』

『黙って守備してろ…！ムカついてんだよ俺ぁ今ぁ…!!』

『気分を聞いているんじゃない!!おい!?切れた…!!マジか奴!!』

うわぁ、なんかもう本当頑張れ、飯田天哉君。あれ、緑谷出久に対する執着本当異常だから。もう、熱烈な恋と言っても過言ではないぐらいだから。

「定点カメラで音声ないとわかんねぇな……って報情?何聞いてんだ?」

「ん?小型無線と設置された音声カメラの音だよォ?――――聞く?」

「えっ?ちょ、君ィ!何したの?!」

「普通にハッキングしましたァ」

「なんでそれ先に言わねぇんだよ!」

「聞く聞くー!」

オールマイトがなんか言ってるが、無視する。

イヤホンをとり音声がスピーカーから出るようにセットする。よし、これで皆聞けるね。

『麗日さん行っ』

『余所見か余裕だな!!』

爆破――――避ける―テープ足に――――攻撃―右の大振り――――避ける――――

「うん。すごいねぇ！感情的になって読みやすい相手とは言え、個性も使わず入試１位と渡り合っているよォ」
「爆発音うるさくて会話がよく聞こえない」
「芦戸三奈君、なんだったら、会話音声だけにするかい？」
「えっ？出来るの?!」
「もちろんだともォ！」

『なァオイ!!俺を騙してたんだろォ!?楽しかったかずっとぉ!!』
『あ?!ずいぶんと派手な〝個性〟じゃねぇか!?
使ってこいや、俺の方が上だからよぉ!!』
「なんか、爆豪すっげーイラついてる」
「コワっ！」
「騙すとは、どういうことでしょうか？」
うーん。自尊心肥大化しすぎだねぇ。別にそんな熱くなる必要無いじゃあないかぁ？
ぶっちゃけ、緑谷出久より、爆豪勝己の方がずっと強いぞォ？

視点変わって、麗日お茶子は核兵器のある場所に辿り着いたようだ。そこには飯田天哉の姿が見える。

『俺はぁ…至極悪いぞぉお』

「「ブフッ!!」」

モニタールームが湧いた。真面目かよ!!

麗日お茶子も思わず笑ってしまったようだ。うん。あれは仕方ないよォ。しかしそれにより、飯田天哉に存在を気が付かれた。

『これで君は小細工出来ない!ぬかったなヒーロー!!フハハハハ』

おぉ!流石飯田天哉。ちゃんと麗日お茶子対策してる。ジリジリと距離を詰められている。麗日お茶子は緑谷出久に通信を入れるが、緑谷出久は今爆豪勝己で手一杯だ。

時間も押してきている。

『「要望」通りの設計ならこの篭手はそいつを内部に貯めて…』

「爆豪少年ストップだ!!」

これから行われることに気が付いたオールマイトは慌てて制止の声を上げる。まぁ、それを聞く爆豪勝己じゃないのだが。

「殺す気か!!」

『当たんなきゃ死なねぇよ』
なんだその『バレなきゃ罪じゃねぇよ』みたいなノリは。まぁ、確かに当たんなきゃ死なないわな。
だけどそれって言外に当たったら死ぬって言ってんのと同じじゃね？

ドオォ!!!

「授業だぞコレ！」
切島鋭児郎が叫ぶ。スゴい威力だなぁ。ビル半壊しちゃったねぇ。
『〝個性〟使えよデク、全力のてめェをねじふせる』
そしてもう君の顔、それ絶対ヒーローじゃないわ。写真撮っとこ。
この爆発の混乱に生じて麗日お茶子が核兵器に触れようとするが、難なく飯田天哉に阻止される。
『麗日さん状況は?!』
『無視かよ、すっげえな』
「先生止めた方がいいって！
ずっと聞いてたけど、爆豪あいつ相当クレイジーだぜ！殺しちまうぜ!?」

「……いや」

「いえ、止めなくてもいいと思いますわ。

彼は妙な部分で冷静ですから、殺すような事は起こさないと思われます。なんと言うんでしょう……？」

『みみっちい』ってやつだね！」

「それですわ！えっと芦戸さん？」

「そうだよ！芦戸三奈！よろしくねー」

どうする。爆豪勝己君、君もう既にクラスメイトからみみっちいって認識されてるぞ。

「室内戦において大規模な攻撃は守るべき牙城の損害を招く！ヒーローとしてはもちろん、敵としても愚策だそれは！大幅減点だからな！」

『～～ああ～じゃあもう、殴り合いだ！』

馬鹿じゃねぇーの？……と失礼。つい本音が。

――爆風に乗り飛ぶ――正面からの攻撃――いや、――そのまま背後を――

――爆破――体勢を整える暇もなく――右の大振り!!

「目くらましをかけた爆破で軌道変更。そして即座にもう1回…考えるタイプには見えねぇが、意外と繊細だな」
「慣性を殺しつつ、有効打を加えるには左右の爆発力を微調整しなければなりませんしね」
　おぉ、轟焦凍に八百万百、解説上手いなぁ。
「才能マンだ才能マン、ヤダヤダ……」
　上鳴電気君、私もそう思う。その運動神経と才能、私にも欲しかった!!
　爆豪勝己のターンは終わらない。緑谷出久はひたすら打たれるのみ。
「リンチだよコレ!テープ巻き付ければ捕らえたことになるのに!」
「ヒーローの所業に非ず…」
「緑谷もすげぇって思ったけどよ…
　戦闘能力に於いて爆豪は間違いなく、センスの塊だぜ」
　まったく。ふざけてるのかなぁ?彼は。……おっとまた失言。
「男のすることじゃねえけど仕方ないぜ。しかし変だよな…」
『なんで個性使わねぇんだ!?俺を舐めてんのか?!ガキの頃からずっと!!そうやって!!!
　俺を舐めてたんかてめェはぁ!!!』
　彼、頭悪くはないはずなんだけどねぇー。

やっぱ感情っていうのは人を狂わせるねぇ。

『君が凄い人だから、勝ちたいんじゃないか!!
勝って!!超えたいんじゃないかバカヤロー!!!』

モニタールームがシンとする。緑谷出久のあまりの強い思いに、意思に、輝きに。
ヒーローとは言えどもまだ卵の彼が、無個性だった彼はその姿勢で私達を圧倒する。
『その面やめろや、クソナード!!!』

「まぁ、爆豪勝己君の方が余裕無いねぇ」
「おい、ホントにやばそうだってコレ!」
「双方…、中止……!」
「いやぁ、その必要はないんじゃないかなぁ?」
私はオールマイトを止める。

『麗日さん行くぞ!!!』

――緑谷出久はＤＥＴＲＯＩＴ　ＳＭＡＳＨを上に思いっきり打ち上げる。
――麗日お茶子がそれによって出来た瓦礫を無重力化、『彗星ホームラン』で飯田天哉を圧倒。
――かくして、核兵器を回収。

『ヒーローチーム、ＷＩーーーーーーＮ!!!』

「スゴかったな!!」
「１戦目からあんなの見せられちゃ、オレたちも力入るぜ！」
「僕がさらに輝くよ☆」

☆☆☆☆☆
その後、緑谷出久はハンソーロボに回収され、保健室に、残りの飯田天哉、爆豪勝己、麗日お茶子はほとんど八百万百による講評を聞いた。オールマイト頑張れぇ。
不思議な事にバカスカ言われても爆豪勝己は何も言い返さなかった。そんな無言を貫く彼に私は声をかける。
「やぁ、爆豪勝己君！酷い戦いだったねぇ！」

「おい！やめろって、殺されっぞ！」
「大丈夫だよォ、切島鋭児郎君。心配ご無用」
私は手袋を外し頭をぶっ叩く。思いっきり。

――――――個性『情報提供』

「っ?!」
「今の戦闘の映像。わかってると思うから私からは1つだけ言わせろ……高くくってた相手に感情的になって負けるとか、馬鹿じゃねーの?」

たっく、個性練習してた時のパフォーマンスを１００だと仮定したら、さっきの戦闘は５０も出せてなかったよぉ?
酷いねぇ。私この対戦楽しみにしてたのに……。
まぁ、飯田天哉君面白かったし、麗日お茶子可愛かったし、緑谷出久カッコよかったから、いっか。
「報情だっけか、アイツヤベェな!あの状態のやつをぶっ叩いた挙句、煽るなんて!」

「あいつも相当クレイジーだぜ」
なんか後ろで言ってるけど気にしない気にしない。
そんなこんなしているうちに次の組み合わせが決まったみたいだ。
ヒーローチーム、障子目蔵＆轟焦凍のＢチーム。
対するヴィランチームは尾白猿夫＆葉隠透のＩチーム。

☆☆☆☆☆
「圧倒的だなぁー」
轟焦凍はビルの全てを氷漬けにしてしまった。やばいねぇー。化け物かよ!!
これで個性半分なんでしょ?･もう１つ炎が出せる個性あるらしいし。でもなんだかんだ理由付けて封印している、と。
「うん。もう彼、氷だけで充分強いよ。わざわざ封印されし左の個性使わせなくていいよねぇ?」
なんであんな嫌がるのを無視してでも、必死に原作では左側使わせようとしてたのか……。
ちょっと理解出来ないねぇ。
そして、障子目蔵君の個性、私も欲しい。羨ましい。あれあったら遠くからでも知り

たい情報を聞けるじゃん!!
……ぜひとも友人にならねば!!

☆☆☆☆☆

「次の対戦相手は!!こいつらだ!!
Eコンビがヒーロー、Fコンビがヴィラン!!」
Eコンビが芦戸三奈&青山優雅。
対するFコンビが口田甲司&報情読気……つまり私かぁ。

「芦戸三奈君、青山優雅君!!敵どうしお互い頑張ろうねっ!」
私は手袋をとって、2人と握手する。はい、私の勝ち。
体をはった戦い?馬鹿じゃないのぉ?楽して勝つ!出来れば戦わない方向性で生きる!
もしも戦いになったら、逃げる!誰かを囮にしてチョー逃げる!!
どんな手を使ってでも私はこれで押し通す!!

――――個性『情報書き換え』

――――君らは何故か核に触れることが出来ない。
「うん。手加減しないからねぇー!!」
「僕の輝きで動けないだろうけどね☆」
何も知らない２人は笑顔で握手を返してくれる。
それが既に私の罠だとは気が付かずに……
私のヒーロー基礎学が始まって、終わった。

「報情少女！今回は戦闘前からの敵との接触はなしだぞ!!」

「マジかよォ!!オールマイト！もう情報書き換えしちゃいましたァ!!」

「なんだって！」

「大丈夫です！２０分に設定したんで、その時間経てば解けます！」

私のヒーロー基礎学は終わらなかった……